



2019年7月22日 奥浅草だより第28号

江戸の文化と奥浅草

吉原遊廓は江戸の華 1617年に発足した江戸の公娼遊郭は、日本橋から現在の奥浅草の新吉原に移り、1946年の公娼廃止指令まで何と330年も続きました。江戸時代の吉原遊廓は、妓楼を中心に花魁や芸者が活躍する夢の不夜城で、最盛時には1万人もの人々がいたそうです。前借金を抱えた女性たちは、働きながら芸や容姿を磨き上げました。歌舞音曲を披露する芸者はもちろん、遊女である花魁も生け花・茶道・踊りはもちろん、義太夫、小唄、長唄、川柳、狂歌、錦絵など、その教養を深めました。内実ともに淑女たる花魁を頂点として、江戸時代のファッションはこの吉原がリーダーでありました。また、待乳山から吉原への山谷掘界隈の賑わいは、歌舞伎・落語・小説からも恩ばれます。

明治期以降は芸者の役割が東京の花柳界に拡がり、後に待合や高級クラブが発展するに至ります。時が経っても変わらないのが、江戸時代からのおもてなしの精神とそのノウハウです。

奥浅草には江戸時代から寺社が多い 東京23区でもっとも寺が多い区は台東区です。それゆえ仏具店も多い。その理由は、江戸城から見て、上野の寛永寺と浅草の浅草寺の間の方角が鬼門にあたり、そのために寺社が多いとされています。小塚原刑場跡の回向院(本所分院)も、投げ込み寺の浄閑寺も、江戸期の初期に開山されています。首切り地蔵の延命寺は、近年の鉄道の建設で回向院から独立したものです。また、浅草名所の七福神(実際は8社)は奥浅草に7社あります。待乳山聖天、今戸神社、橋場不動尊、玉姫稻荷、鷲神社、吉原神社、石浜神社がそれにあたります。

江戸時代の人々の生活の基盤たる信仰は、この奥浅草で垣間見ることができます。「手を合わせる」・「手を打つ」文化は、江戸の昔から奥浅草で息づいていました。そして今も共同体を陰ながら支える力になっているでしょう。

この「奥浅草だより」は『奥浅草 地図から消えた吉原と山谷』の発行後話題を拾って不定期に発行しております。

サノックスのホームページでもご覧いただけます。 <http://www.sanox.co.jp>

佐野陽子・江原晴郎・森下恒子